

県指定有形文化財(昭30.1.25)

浦添ようどれ 石厨子

4基



ようどれの資料館で、レプリカを見ることがあるよ。

素材の輝緑岩は、中国から輸入しているから、権力を持っていた人のものなということがわかるね。製祖下の尊かさが理解できるね。



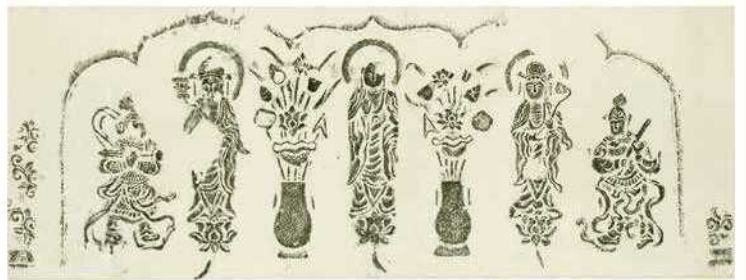
琉球の仏教伝来を物語る資料



①墓室内部(英祖王統陵)



②西室に安置されている石厨子



浦添英祖陵石棺正面【拓本】 沖縄県立図書館所蔵 CC BY 4.0 (<http://creativecommons.org/licenses/by/4.0/deed.ja>)

浦添ようどれは、浦添城跡北側の崖下中腹にある、英祖王統と尚寧王(在位:1589～1620年)の陵墓です。墓室内の石厨子のうち、英祖王統陵の大型1基、中型2基、及び尚寧王陵の大型1基が文化財に指定されています。いずれも中国からもたらされた輝緑岩で造られています。

屋根は4基とも方形づくりで、瓦葺きをかたどり、軒瓦の瓦当には花紋があります。

棟には龍、鳳凰の彫刻があり、中央に宝珠が施されています。また側面には菩薩、如来、地藏の浮き彫りがあります。英祖王統陵の中央正面の大型厨子と尚寧王陵の大型厨子は、台座と石棺が別造りになっていて、台座側面には馬、鹿、鶴、亀、獅子、蛙、椿、牡丹などの動植物が浮き彫りされています。

浦添グスク・ようどれ館
〒901-2103 沖縄県浦添市仲間二丁目53-1
【休館日】月曜日・12月28日～1月3日
【電話】098-874-9345

(写真提供:①～②浦添市教育委員会)



どうして崇元寺では
馬からおりなくるや
いけないの?

琉球を治めていた土様たち
をお祀りしているお寺だか
らだよ。今でも崇元寺に行
くと普通に見る、とができ
よ。また、下馬碑は、中国や
韓国の宗廟にもあるよ。



そう げん じ
崇元寺
げ ぼ ひ
下馬碑

1基 高142.4cm 幅45.8cm 厚11.5cm



くまにてむまからおれるへし



■ 崇元寺下馬碑(表)

崇元寺石門の前面東側に石碑が建っています。沖縄戦以前は東西に対をなしていましたが、西側の碑は戦争で破壊されました。

両碑とも同じ文章で、表側中央には「あんしもけすもくまにてむまからおれるへし」、その左上に「大明嘉靖六年丁亥七月二十五日」と刻まれています。この意味は、「按司も下級の役人もここで馬から下りるように」ということです。この内容から、石碑は崇元寺下馬碑と呼ばれています。また、裏側には「但官員人等至此下馬※」と漢文で記されています。

この碑の材質は、細粒砂岩で、碑の上部に日輪と鳳凰、瑞雲、碑面周囲に唐草模様を組み合わせています。

※但官員人等は此に至れば下馬せよ



■ 崇元寺下馬碑(裏) [拓本]
沖縄県立図書館所蔵 CC BY 4.0
(<http://creativecommons.org/licenses/by/4.0/deed.ja>)

とう りん じ に おう ぞう
桃林寺仁王像

2躯 阿行 像高170.1cm 吽行 像高167.0cm



怖ろしい表情をしているけど、ずっと八重山の人々を見守ってきたんだね。

1771年、八重山や宮古諸島を襲った明和の人津波では、桃林寺も大きな被害にあったんだ。その際、この仁王像が崎杖という集落の浜に流されたという伝承が残っているよ。



八重山の人々に愛され続ける仁王像



桃林寺仁王像(吽形)



桃林寺仁王像(阿形)



阿形(拡大)



吽形(拡大)

石垣市の桃林寺山門の左右に配されている仁王で、口を開いた阿形像と口を閉じた吽形像からなります。

桃林寺は、薩摩から進言を受けた第二尚氏尚寧王により、1614(万暦42)年に創建されました。この寺は、禅宗の臨済宗に属し、山号は南海山と称し、首里の円覚寺につながりがありました。

この仁王像の作者、久手堅仁屋昌忠や小濱

仁屋当明の詳細については不明ですが、阿形像の背面に2人の名前と奉行役人や1737(乾隆2)年などの製作年が記されています。

戦前まで、仁王像は首里の円覚寺のものが有名でしたが、戦災で焼失したため、この像が戦前から残る唯一の金剛力士像です。2体とも、八重山産のオガタマノキという木を用いた寄木造りです。

(写真提供:桃林寺)



昔賢菩薩が乗っていた姿を見たかったね。

琉球に象はいなかったから、作者が想像で彫ったものなんだ。だから、顔や全体の姿が実物とは少し違うよね。



木彫円覚寺白象 並びに趣意書木札

1軀 象 頭高61.2cm 胴高54.5cm 全長121.2cm 趣意書木札 1枚



琉球で彫られた最古の木彫



木彫円覚寺白象



白象(拡大)

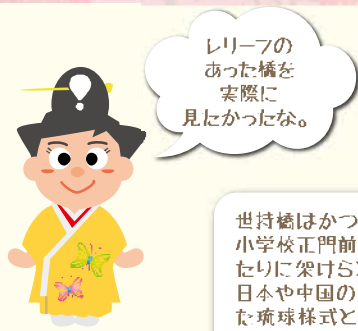
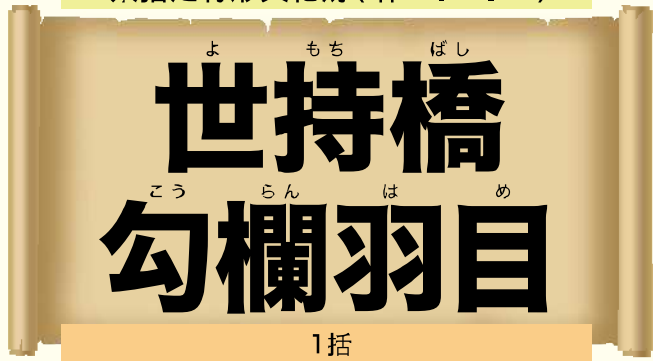
円覚寺にあった沖縄で最も古い木彫作品です。円覚寺は、尚真王時代(在位:1477~1526年)の建造物で、沖縄で一番大きな寺でしたが、残念ながら沖縄戦で焼失しました。

この白象は普賢菩薩が乗っていたもので、当初は文殊菩薩が乗った獅子像と対をなしていましたが、獅子像は戦災にあい、頭・胴・足等の一部が残っているだけです。白象は円覚寺の焼跡から発見されましたが、肩部・背面・鞍が破損しています。材質はイヌマキ(チャージ)で、寄木造り、内削りの技法が使われています。

白象の胎内には、修理について記した木札があります。これによると、1519(正徳14)年に作られたが、破損が著しいため1693(康熙32)年、尚真王の命令で修理が行われたとされています。沖縄は仏教美術関係の資料が乏しいため、貴重な資料の一つです。



趣意書木札
(作られた経緯・関わった役人の名前が書かれている)



世持橋はかつては、今の城西小学校正門前の坂をおりたあたりに架けられていたんだ。日本や中国の様式を取り入れた琉球様式と呼ばれる形をしていたんだよ。鎌倉芳太郎著『沖縄文化の遺宝』という本に写真が掲載されているよ。



一つの彫刻に共存する静と動



■羽目(魚)



■かつて世持橋がかけられていた龍潭の水路



■羽目(菖蒲)



■羽目(貝)



■羽目(貝)

世持橋は、1661(順治18)年に慈恩寺跡から龍潭の北西側に移築し架けられていた橋です。沖縄戦で破壊されたため、現在は羽目と支柱の一部のみが沖縄県立博物館・美術館に保存されています。小さなアーチ状の橋で、支柱や羽目は細粒砂岩で出来ています。

この羽目は当初、大小の円筒支柱の間に左右にそれぞれ8枚配され、かぶとの形をした羽目の両面に魚、海老、貝、水鳥、菖蒲などの模様を浮き彫りしています。その表現は、おおらかで力強く、沖縄における石材彫刻の傑作の一つです。



今も、
円覚寺の放生池に
橋は架かって
いるよ。

円覚寺の放生池に架けられ
た小さな橋で、1498年建立し
たことを示す文字が親柱に
刻まれているんだ。



えん かく じ ほう じょう ち
円覚寺放生池
いし ばし こう らん
石橋勾欄

1括



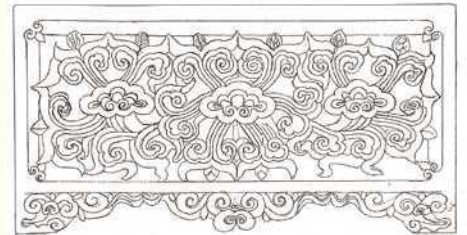
沖縄石彫美術の最高峰



■羽目(牡丹)



■羽目(花唐草)



■羽目(花唐草)のトレース図

旧円覚寺の放生橋は、建造物の重要文化財として国指定になっていますが、この橋の勾欄の羽目に施された彫刻群は、県指定の有形文化財です。

8本の親柱の柱頭には子連れ獅子の彫刻が並んでいましたが、沖縄戦で破壊され一部を残すのみです。

勾欄羽目の石材は、中国からもたらされた輝緑岩で、獅子、鶴、亀、鹿、鳳凰、梅、牡丹、蓮華など動植物の文様があり、下側には唐草文が彫刻されています。一部に浮き彫りもあり、全体的に大胆でありながら精密で、沖縄の石材彫刻の中でも優れています。

規模が小さいながらもこの橋は、沖縄の石彫美術の最高傑作であると言われています。



■獅子像



■羽目(獅子)



■円覚寺放生橋欄干の銘 [拓本]
沖縄県立図書館所蔵 CC BY 4.0
(<http://creativecommons.org/licenses/by/4.0/deed.ja>)

たま うどうん
玉陵
 せき ちよう し し
石彫獅子

1対 高 122.5cm 高 118cm (紐を加えている獅子)



私たちが、
いつも見ている
シーサーとは
感じがちがうね。



玉で遊んでいる姿が面白い
ね。左側のシ・サーは子ど
もを抱っしているよ。また、
普通のシーサーと違って、こ
のシーサーは立っているの
が特徴で、とても珍しい姿
なんだ。



世界遺産・玉陵を守る一対のシーサー



墓室左上にある石彫獅子



墓室右上にある石彫獅子



玉陵墓室石蕭(東室より望む)



玉陵墓室石蕭(西室より望む)

第二尚氏王統の陵墓である玉陵の左右上部に設置されている一対の石獅子です。材質は輝緑岩です。

獅子は1501(弘治14)年の玉陵造営と同時に、またはその近い時期に造られたと考えられています。沖縄の獅子像は、ひざまずくか這うポーズが多いのですが、この獅子は立っているのが特徴です。一体は玉や玉紐とじゃれ、もう一体は子獅子と遊

んでいます。一見、怪奇な表情をしています。よく見るとどことなくユーモラスで、作者の高い技法を見ることができる傑作です。

この獅子像は沖縄戦により陵墓の上から転落し、一部破損していました。一時は沖縄県立博物館に収蔵・展示されていましたが、1977(昭和52)年に玉陵の修理が完了した時に元の位置に戻されました。

い ぜ な たま う どうん ない
伊是名玉御殿内
い し ず し
石厨子

2基



誰が
眠っているのかな。

尚門の姉の孫が入っていると伝えられているよ。尚円が生まれた島だから、土御殿があるんだ。今でも第二尚氏の子孫の方々が清明祭を行っているよ。



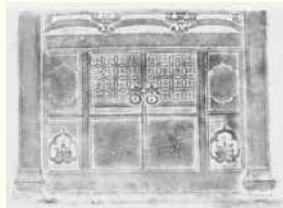
尚円の故郷にある、一族の貴重な石厨子



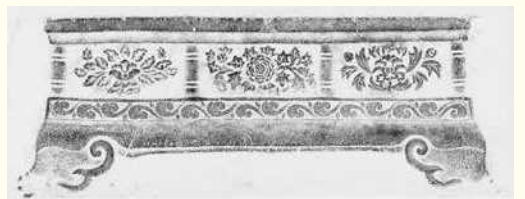
1号石厨子



2号石厨子



2号石厨子の前面に施された彫刻(拓本)



1号石厨子の前面に施された彫刻(拓本)



(拓本提供: 沖縄県立博物館・美術館)

伊是名島は、第二尚氏王統を開いた尚円王の生誕の地とされています。島の南東に位置する伊是名城跡の北側中腹に、伊是名玉御殿と呼ばれる墓があります。この墓は、首里にある玉陵と同じく、第二尚氏王統に関わる墓です。

墓の中には、中国からもたらされた輝緑岩で

出来た石厨子があります。入母屋型の厨子で、尚真王代(在位: 1477~1526年)の作品とされています。

首里玉陵にある石厨子と比べると質素な造りですが、前面に施された牡丹や獅子の浮き彫りはとても素晴らしく、彫刻作品として優れています。

県指定有形文化財(昭33.1.17)

小禄墓内 石厨子

1基 高48.5cm 奥行48.5cm 幅68.2cm 料棟の長さ47.0cm 屋根の高さ24.2cm 台の高さ15.6cm



琉球で最も古い石厨子



宜野湾市の
嘉数高台公園の
近くにある
墓だよ。

材質の輝緑岩は、沖縄産
の石と比べて、非常に重く
て硬いんだ。だから、これ
に彫刻を行うのは、苦労し
ただろうね。



小禄墓石厨子(正面)



小禄墓石厨子



彫刻(拓本・背面)

彫刻(拓本・側面)

彫刻(拓本・側面)

彫刻(拓本・正面)

この石厨子は、宜野湾市嘉数に位置する小禄墓に納められています。

厨子の正面中央に線彫りされた「弘治七年おろく大やくもい六月吉日」の銘は、沖縄に現存する最も古い仮名文字です。中国年号の弘治7年は1494年ですが、「おろく大やくもい」という人物については不明です。

厨子の屋根は瓦葺きの形となっており、棟に

は火焰宝珠と龍の彫刻があり、銘の左右には童子2人の浮き彫りがあります。

石材は中国からもたらされた輝緑岩です。輝緑岩を素材とする石厨子は、浦添ようどれ石厨子、玉陵石厨子、伊是名玉御殿石厨子、天山陵石棺(残欠)等があり、いずれも15~16世紀に作られた作品となっています。



500年以上前に作られた石碑だけど、しっかり文字を読むことができないね。

輝緑岩で作られているから、今でも読むことができるんだ。沖縄戦で砲撃を受けて、少し欠けているよ。



たま うどうん ひ
玉 陵 碑

1基 碑 高87cm 幅30cm 厚9cm



あらそう人あらハ ちにふしてたたるへし



玉陵碑



玉陵碑の碑文 [拓本] 沖縄県立図書館所蔵 CC BY 4.0 (<http://creativecommons.org/licenses/by/4.0/deed.ja>)

1501(弘治14)年に第二尚氏王統の陵墓である玉陵の中庭に建てられた石碑です。石材は中国からもたらされた輝緑岩です。碑文は上下二段にわけられ、上段に尚真王ほか8人(尚円王妃、尚円王長女、尚真王長女、尚真王第五子尚清、尚真王第三子、第四子、第六子、第七子)の名を連ねています。下段は「しよりの御ミ事」として、「以上九人 この御すゑは千年万年にい

たるまで このところにおさまるへし もしのちにあらそう人あらハ(中略)ちにふしてたたるへし」とあり、「碑文に示されている者以外を葬ってはならない」と記してあります。

現存する仮名書き碑文としては古いものの一つで、碑面の模様や文字などの彫刻技術とともに、歴史資料としても高い価値があります。

きゅう えん かく じ かん けい
旧円覚寺関係
 もく ちょう し りょう
木彫資料
 35点



首がない仏さまは、
 なんだか
 かわいそう。

完全な孝ではないけど、
 それでも貴重な彫刻なんだ。
 京都や中国で生まれた仏像
 なんだね。これも鎌倉芳太
 郎著『沖縄文化の遺宝』に
 掲載されているよ。



ありし日の円覚寺を偲ぶ彫刻群



釈迦如来坐像



①釈迦三尊像(戦前の仏殿の様子)



羅漢像



②十六羅漢像(戦前)

(写真提供:①~②沖縄県立芸術大学附属図書・芸術資料館)

旧円覚寺は、琉球国王第二尚氏の菩提寺でしたが、沖縄戦によって破壊され、境内に散乱していた彫刻の破片が1947(昭和22)年に収集されました。木彫資料は被災時の損傷が著しく、大半がその原形を失っていましたが、仏像については2007(平成19)年に修復され、現在の姿になりました。

有形文化財として、釈迦如来坐像、文殊菩薩坐像、普賢菩薩坐像や十六羅漢像等19体の仏像及び、建築装飾部材の欄間彫刻等16点の

木彫関係資料35点が指定されています。これらは円覚寺の彫刻史に関し、昔の姿を具体的に物語る貴重な資料です。

本尊である釈迦如来像と、その左右に置かれた普賢菩薩像・文殊菩薩像は、体の中の記録から「寛文10(1670)年11月」、京都の吉野右京によって制作されたことがわかります。

また三門の十六羅漢像は中国の福建省で造られ、1696(康熙35)年に琉球へもたらされました。